

「濃密化」がおこり、労働強度が増大し、その結果として欠勤率や労働能率が悪化し労働災害が増加しつつあると書かれているが、これについてはデータの提示がなく、複雑な問題があまりに単純化されて書かれているとの印象を受けた。この個所は著者らしくなく議論が大ざっぱすぎるのではなかろうか。

以上、批判部分は外在的批判にならざるをえなかったことを申しわけなく思っていることを記して、この書評のペンをおく。
〔富永健一〕

徳 永 重 良

『イギリス賃労働史の研究』

法政大学出版局 1967.7 viii, 371, iv ページ

本書は、「帝国主義段階における労働問題の展開」というサブ・タイトルにもしめされているように、一方では、「自由主義段階」に対置されるべきものとしての「帝国主義段階」という把握を基底にすえ、他方、「多かれ少なかれ当時の問題のヴァリエーションにすぎぬ」現在の問題の基本ないし源流をみいだすことを、うらの問題意識として、19世紀末から20世紀初頭のイギリス「賃労働」の諸問題・諸特質の歴史的考察を、より具体的にはたそうとするものである。

著者は、そのことをとおして、同時に、「政治追従的な労働問題の研究」、「先進国イギリスをモデルとし、他国の現状をそれからの偏差として捉え」る「単純な二〔次〕元論」(〔 〕は筆者)を、反省・批判し、さらには「原理論」と個々の資本主義国の分析の「媒介項」の設定、「日本資本主義のいわば座標軸の設定」をさえめざしている。

具体的に展開されている本書の論点は、ほぼ以下のようである。まず「自由主義段階」の素描として、その「段階」的特質をよりつよく体現するものとして綿工業が、資本主義的純化傾向の面でおさえられ、他方、そこでの「非中心的分野の例」、「産業的なズレを体現するもの」として、したがって理論的範疇の「硬直的援用」が不適切な例として、さらにのちの論点の布石として、機械工業がおさえられる。ここでは、両産業の分断的把握が特徴的である。

その構図が、19世紀末から20世紀初頭にかけて、大不況、あるいは重化学工業にみられる一連の技術史上の変化等を契機として、いかなる変ぼうをとげていくかという主対象＝「帝国主義段階」についてみれば、「支配的資本の形態変化」が、これは論理的に指摘され、それに

ともなう生ずる諸局面の変化に目がそそがれるのだが、わけでも「イギリス的特質」が、すなわち一面でみれば「端的にいて対応の消極性、不徹底性」がみられる機械工業分野に、「研究上1つの戦略的産業」としての地位があたえられる。こうして「帝国主義段階」におけるイギリス機械工業分野の労働問題の諸変ぼうが、「自由主義段階」との「類似と相違」を明白にするという姿勢で、克明に追究されることになる。

その叙述の範囲と内容は、著者みずから「事実をできるだけ前面におし出す叙述法を意識的にとった」といえるだけあって、技術、経営形態からはじまって、熟練の形成過程と労務管理、労働市場と賃金水準、諸格差のありようからみた賃金構造、さらに賃金形態、労働組合運動、はたまた社会政策のありかたにいたるまで、きわめて多岐にわたる。

したがって、それらの論点を「因数分解」することは、「事実」じたいのゆえにということもあって、困難であるが、あえて大筋をたどれば、失業問題の、ほとんど「段階」を画する激化を、また熟練の分解基盤の深化を基底として、クラフツメンのオパラティヴ化、徒弟制度の全般的衰退傾向、雇用形態さらには賃金形態の変化傾向が、うらがえせば、企業内技能養成の制度化の、あるいは「科学的管理法」の部分的適用化の傾向、そして経営権の強化・集中化傾向が、指摘される。そこで特徴的なことは、それらの傾向のほとんどについて、ときにはドイツないしアメリカの同時代との、ときには「自由主義段階」との対比の点で、その非顕著性がくりかえし指摘されていることである。

しかし著者は、その限定をふさざるをえない状況のなかでも、たとえば1897-8年大争議にみられる資本の組織的反撃、その反作用、あるいはこの段階のより一般的な「対応」としての「一般組合」と「産業別組合」の生成および旧組合運動の変容という三重のうごき、Lib-Labから労働党への旋回、他方「非イギリス的＝非レセ・フェールの」たとえば社会保険制度の導入等を指摘して、たとえそれらが鮮明なものでなかったにしろ、そこに「段階」を画するものをみようとする。

こうして著者は、「自由主義段階」にたいする「帝国主義段階」を、一般論的には、「純粋化傾向」にたいする「不純化傾向」とおさえようとするが、しかしイギリスでは、「帝国主義段階」において両傾向が「錯綜しながらも全体としては重複して現われ」、しかも「不純化の動き」は「量質ともに微弱なものにとどまった」点に、イギリス労資関係等の特質をみ、それはイギリス資本主

義の、「自由主義段階をより徹底した形で経験した」という「歴史的特殊性」にかかわるものとする。しかしまた著者は、「この段階の労働運動が前段階〔のそれ——おそらく織布工労働組合が念頭にある——(筆者)]の普及過程であると同時に、明らかにそれを超える、より高度な性格のものである」と結論し、ただそれが「不徹底」であったことについては、それは、いまひとつ、前「段階」のイギリス労働運動の経験の特殊性＝クラフト・ユニオンの強固な展開にかかわるものとする。まさに「すぐれて特殊歴史的産物」が、そこにあることになる。

このような「特殊歴史的産物」に多角的に克明にメスをいれた本書は、のちにいくつかの問題をわたくしは指摘することになるとはいえ、日本では、たしかに「開拓的業績」という名にあたいするし、今後のわたくしたちの研究にあつみを保証してくれるといい。本書は、著者の方法の一面にまさに関連して『イギリス賃労働史の研究』と題されたのであろうが、その発想は、これまでも、労働者階級の歴史という分野の研究者の問題意識にはあったろうし、事実その発想を基底に具体化されたモノグラフもあるとはいえ、それがおおきくまとめられたのは、これが最初だといっているからである。イギリスでも、労働者階級の歴史の研究の「旋回」と名づけられさえするここ数年のうごきの軸に、「労働史学会」があることを、わたくしはおもいあわせる。(ただ、ここではちいさな問題として、「労働史」という訳語、したがってまた著者の対象領域をつつむものとしての「賃労働史」ということばに、いまわたくしは一考の余地がありそうだと感じていることをつけくわえておきたい。)

ところで、わたくしはすでに他の稿で、本書についてきわめて簡略にふれたのであったが、それは「自由主義段階」対「帝国主義段階」という、本書の基本設定にかかわらせてであった。誤解をさけるために書きくわえれば、もとより、「段階」の設定が問題なのではなく、また一般論としての上記の段階設定が問題なのではなく、イギリスの「賃労働史」分析にあたって、とりわけ「自由主義段階」という設定が、どこまで有効かを、わたくしはひとつの問題としたいのである。もちろん本書の主題は、「帝国主義段階」にあるのだから、それは、本能的には土俵外の問題ともしうるが、著者の方法的反省にてらしてみると、問題のひとつとされていい。それはまた、19世紀イギリス資本主義の性格規定にかかわる問題でもあれば、なおである。

「自由主義段階」について、綿・機械両産業分野の分断的把握が、著者の特徴であることは、すでに指摘した

が、分断してそれぞれの特質を抽出する意味は否定できないとはいえ、「段階」としての特質を問うばあいは、それらをいまいちど、まさにその「段階」の総体的構造・基盤のうえに位置づけなおすことが必要になる。それを欠くとき、その「段階」の全体像は不明になる。わたくしは、19世紀イギリス資本主義の最先進・自生性と「自由貿易の帝国主義」側面とを基底にしてはじめて、その全体像はえがかれるとかがえている。そして歴史分析としては、著者が問題とされるイギリス資本主義の「特殊歴史的産物」は、その全体像との連関からも、むしろそこからこそまず問われるべきではないかとわたくしはかんがえる。

部分的な疑問、あるいは著者をふくめてわたくしたちじしんの今後の問題ということでは、たとえば、すでにふれた問題にも、またクラフト・ユニオンの評価にもかかわるのであるが、その構成員であるクラフツメンのイデオロギーを「プチ・ブル的意識にきわめて類似したもの」とし、かれらを「精神的にも『労働貴族』」としてきりすてることは、その側面ないし傾向を否定しきすることはただちにはできないとはいえ、またそれが本書の本論部分でないとはいえ、著者の方法の一面にてらしてみると、「硬直的」でないといえるだろうか。

たとえばまた、社会主義思想が「イギリスにとって外から」「注入されたものであったことは特徴的である」というとき、しかも、「しかもそれ〔イギリス〕にとって後進資本主義国から」というとき、著者の批判する「単純な二元論」とはまたべつの意味で、先進国対後進国という「単純な二元論」におちいる危険はないであろうか。いいかえれば、イギリスの労働運動の思想的伝統のなかには、マルクス主義をうけついでいく核は皆無であったのか否かという問題である。この点については、すでにホブズボーム氏の問題提起があり、邦文でも、本書の刊行後にであるが、安川悦子氏がそれにふれており、かなりの検討の余地が、わたくしたちにはなおのこされているといわなければならない。こうしてわたくしたちが、運動史と結節する思想史の領域にまではいっていかうするとき、わたくしたちは、研究上のよりすぐれた分業と協業をかんがえなければならないのであろう。

わたくしは著者の本論からずれたところで問題をだしすぎたかもしれないが、最後にひとつつけくわえるならば、杉山忠平氏による「もっと1次資料を!」という要請にも、著者のみでなく、この分野の研究にたずさわるわたくしたちが、ともどもにこたえてゆかなければならないのであろう。

〔鈴木幹久〕